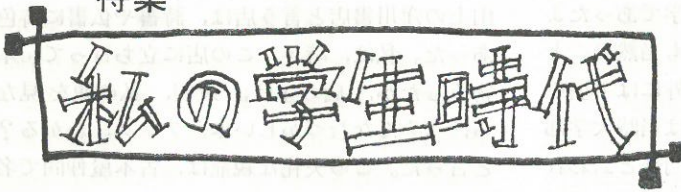


# KOZMOS

特集・私の学生時代…… 1  
 昭和55年度学生購入  
 希望図書状況…… 5  
 シリーズ読書論・  
 万卷の図書への惜別…… 6  
 KOZMOSの  
 ルーツは？…… 6  
 私のすすめる一冊の本…… 7  
 工学部分館より…… 7  
 白山より…… 8  
 朝霞分館より…… 8  
 館内だより…… 8  
 編集後記…… 8

1981 春 (No. 53)

特集



入学、進級おめでとうございます。今回のKOZMOSは、昭和初期から30年代までの4人の校友の方々に登場してもらい、当時の思い出の中から東洋大学の姿を綴っていただきました。

私の新入生時代

理事長 柳井幸太郎  
 (昭和9年文学部国文学科卒)

原田講堂と称する木造の一階土間に立つと、金網越しにチョンマゲの親父さんがヨレヨレの袴をゆすっていた。私はこのチョンマゲさんから願書もらったのである。この方は墨絵をやり、書を良くし、尺八を奏でる図書館主事で、横山雪堂と云われていた。昭和4年5月である。私はこの年予科に補欠入学をした。総勢100人余り、住宅地と道を挟んで建った西館（現三号館）が新しい鉄筋で、予科および学部の教室に当てられていた。鉄筋の建物と云えばその後8月に出来た図書館（現短大事務室）と2つだけである。その他はすべて木造で、京北の校庭を歩いて石段を登った突

当りに淡青ペンキの講堂があり、中には小松宮彰仁親王の書かれた「護国愛理」の額が懸っており、片隅に黒いピアノがあつて寒々としていた。猫の額のような中庭を囲んで北側に食堂があり、二階では講演部の学生ががなっていた。南側には二階建の原田講堂が東から西に伸び、鍵形にもう1つの建物が北に伸びていた。そして裏門に通ずる道を挟んで更に1つの建物があり、どの建物も廊下は節瘤で凸凹していた。

私は何の因果か、晩学の為か、入学して間もなく級長にされてしまった。当時級長制度と云うのがあつて、これはクラスの小使役である。予科の時の教室は殆ど固定していた模様で、私は教室と事務室、或は教員室と度々往復させられたものである。或る時のことである。時間が来ても先生が見えないので例によって迎えに行った。それでも仲々先生が見えない。その中1人の学生が「来た

明治 20 9	22 11	26 12	33 5	33 9	37 4	39 6	大正 5 4	8 6	昭和 3 3	7	4 6
哲学館開館	図書館発足	哲学館焼失	講館落成・図書	学科と本科に分離	私開代立校長に哲学館門大了学初	私改称立東洋大学と	女子の入学許可	創井上門了逝去	大学設立の認可大	3号館落成	図9号館(現落成の)

来た」と教室内の仲間に知らせた。ところがである。「来た来た」とは何事だ「見えた見えた」と云うべきである。と云う訳でガッチリ絞られ、その上私は教員室に呼びつけられて、級長であるが故にと有難いお説教を賜わった次第である。何ともホロ苦く懐しい思い出でもある。

当時は制服制帽であり、予科は蛇腹の巻かれた丸帽で角帽は学部と専門部にだけ許されていた。老も若きも黒の詰襟に金ボタンの制服である。何しろ予科と云っても中学を卒業してストレートに来る者は半分そこそここであったと思う。入学が困難で浪人が多いのではなく、自ら勉強しなくなったと感じた道草者共の集まり易い大学であったような気がする。この現象は専門部にも当然のことながら共通していた。ただし予科以外には羊羹色の紋付袴の姿が案外多かった。本学は当時学部と云われた5年制の最終クラスと専門部と云われた3年制と予科を持つ大学令による文学部と同居していた。専門部は数は多いし、学友会（現自治会）の面でも何時も優位に立っていた。予科と専門部には軍事教練と云うのが正科となっていた。従って現役の陸軍中佐と予備役の准尉とがいて、西館屋上で大いに絞られたものである。何しろ教練が不合格となると卒業が出来なかったのだから大変である。夏休みが過ぎて漸く馴れたと思った秋、習志野の兵舎に数日間の宿泊野外演習を強制された。全員海軍式の白いゲートルを脛に巻き、背囊を背負って38式の銃をかつがされ、1年生よろしく大いに若さをあおられて、黒い服がホコリと泥で白くなったものである。然し良き時代でした。27円位で1ヶ月の下宿生活も出来るし、貸間下宿の貼紙は街の随所にあっってお好み次第である。市電は7銭で何回でも乗り換え出来るし、市営食堂は結構安く食わしてくれた。何かと割引の多いまだまだ学生のもてた時代である。

○——古本屋街で——○

社会学部教授 和田吉人  
 (昭和20年文学部仏教学科卒)

私が東洋大学の予科に入学したのは、もう、48年も前のことになる。田舎から出て来たので、東京で見るもの、聞くもの皆、珍しかったが、一番多く足を運んだのは、神田と本郷の古本屋街だった。神田も本郷も、今よりは店の数も多かったし、集めてある古本の種類も豊富だったと思う。東洋大学の周辺にも、古本屋が数軒あったが、白山上の窪川書店と言う店は、詩書や仏書に特色があった。私は、時々、この店に立ち寄って、本を物色したが、店の主は、最初、私の顔を見ながら、“そんなむづかしい本、アンタ、わかる？”と言った。この失礼な親爺は、古本屋仲間で名の通った古書通であると言うことだった。上京に際して、袂の大きな大人の着物を仕立てもらっていたけれども、私はそれになじめず、着慣れた筒袖の紺を着ていたので、子供と見られたのだと思う。

私が、最初買った本は、樋口一葉全集だった。学部で、文学を専攻するつもりではなかったけれども、予科のうちには、なるべく広く読書した方がよいと言われていたし、この全集が、大冊2冊で80銭と言う安さであったので、買う気持ちになった。別に、読書計画があった訳でも、一葉について興味があった訳でもなかった。自分の判断で、物を買う経験は初めてであったので、1円以上もするような本を買うことは、差し控えたのだ。流麗な文章だったので、数日で読み終った。むづかしくはなかった。どうしたことか、日記の部が面白くて、繰り返し読んだ。

万葉集古義は、13冊で7円50銭だった。本郷の

昭和 9 1	10 4	20 4	24 3	24 6	26 3	29 10	31 6	33 7	33 12	34 1	34 3
講落 堂成 (現 10号館)	教授 授練 講を 師子 学科科 の部に 別に を武 を教道 える	空・焼 襲図失 に書館 より館 講以 外は 堂は	新制 大学 へ移 行	7号 館落 成	財学東 団か洋 法ら更 学大 人学 東校へ 洋法組 大人織	4号 館落 成	5号 館落 成	東置 洋学 研究 所設	埼繪地 玉合を 川大購 越学入 市建 設 に用	東発 洋足 大 学 父 兄 会	5号 館 増 築 落 成



本屋で買って帰ったが、これは読みづらかった。13巻はジュウサンクワンでなくて、トウマリミットユウマキと読むのだ。頑固な国粹主義がおかしかった。とうとう、予科では読み切れず、学部に入ってから、病を得て休学した時に、療養のつれづれに全部読み終った。

生活費は、毎月40円を送ってもらっていたが、東京での下宿生活は、30円でこと足りた。翌月分の送金を受けると、使い残した前月分のお金を持って、神田の古本屋に出かけた。予め、目星をつけて置いた古本を買集めて風呂敷に包んで帰ったが、10円も買うと、大変な重さになったので、下宿に帰りつく頃は、汗が流れた。

当時でも、読みたい本が、何時でも手に入ると言うことではなかった。藤原咲平博士の“雲”と言う本が必要になったので、神田の古本屋街を探したが、なかなかなかった。同一著者の“雲を掴む話”なら沢山あった。何日も、神田に通って、探したが駄目だった。雲を掴むような仕事だと、途方に暮れたが、思い直して、しらみ潰しに探した結果、とうとう探しあてた。大版の本で、大空に拡がる雲の写真が美しかった。

“学問をする者が翻訳などを読んでいるようでは、駄目だ”と言う先生の言葉を、まに受けて、私はドイツ語の大きな原書を買って来た。辞書を片手に、とりかかったが、何分、アー・ベー・ツェー・と始めたばかりであったので、どうにも歯が立たなかった。それでは、夏休全部をかけて、読もうと思って、田舎に持ち帰ったが、それでも、無理だった。僅か数ページを読んだだけで、再び、重さに堪えながら、東京に運んだ。

窪川で買った寒山詩の中に、“心中無価の宝を知らずんば、盲驢の脚にまかせて行くが如し”と言う句があった。果して、私が無価の宝を知ったかどうか、今だに、分らない。

## ○——私の「奥の細道」——○

電子センター業務室長補佐 三浦久子  
(昭和34年短期大学部文科国語専攻卒)

当時、東洋大学を知らなかった。結婚に失敗し、私の生きる場所は東京にしかないと思い詰めて上京した。昭和29年のことである。父の従弟が美校を卒て(美校出の道ちやんと云った)郷里で絵の教師をしていたが、突然家族を棄て、上京し東京にアトリエを持った。私の上京の目的も芸大に進むことだった。地方の田舎町で、東京の大学といえば芸大しかないように思っていた。身近かにいた父のその従弟の影響が大だったと思う。

ところが私は東洋大学に入った。入学試験を受けたか受けなかったかも判然としていない。いつのまにか学生になりいつのまにか卒業していた……というのが、今になって思う実感である。美校出の道ちやんの兄である国井淳一(東洋卒、当時、常務理事)に勧められて東洋大学を知った。学生になる前に職員に採用されていた。戦後の私大の発展途上の頃で、東洋大学も年ごとに学部が増設され、教職員が大量に増えつづけていた。話が違ふ。こういうことではなかったと、ずいぶん自問自答した。勤めを退めようと幾度考えたかしかない。その度に国井淳一から「東洋大学で哲学を学びなさい」と執拗に勧められた。芸大に入れないならどこでもいいという、半ば諦めの心境で、私は哲学ではなかったが短大の国文科へ入った。当時短大は二部しかなく、そこなら勤めを退めることもないと考えたからだ。そんなわけで“私の学生時代”はない。図書館へも一歩も足を運ばなかったし、一つの講義に心酔しその先生の研究室へ通うということもなかった。学友の顔も名前すら一人も憶えていない。今思うと学生であったこと

昭和 34 5	35 6	35 6	36 2	37 9	38 4	38 11	39 3	39 5	39 6	
ア研究 ア所設 ア設置 フリカ	川部舎 越教落 校養成 地課 に程 工用 学校	比置 較法 研究 所設	工学 部本 館落 成	2完 号了 館1 期工 事	附校等 属設学 姫置校 路・設 高南置 等部 学高	2完 号了 館2 期工 事	第催 1回 白山 祭開	2完 号了 館3 期工 事	工成 学部 2号 館落	舎 木落 成 学 科 校

が不思議な感さえる。

けれども唯一つ、今でも鮮明に残っている記憶がある。私の「奥の細道」がそれである。2年の時、古典(Ⅱ)を履修した。浜田先生の「奥の細道」で、成績評価が60点だった。私は愕然とした。教務課の転記ミスではないかと思った。転記ミスでないことがわかると、更に衝撃は大きかった。試験の方式はレポート方式で、私は溢れんばかりの気持を抑え、一年がかりで調べ上げたことを丹念に書き込んだ。小論文ほどのボリュームがあったと記憶する。芭蕉が日光から黒羽へ向う書き出しに、これから那須の野越えにかかるという言葉がある。玉生、鷹内、矢板、沢村、大田原を経て黒羽に至る道程だが、私の郷里が那須野の崎のその辺だったことから、専門家達の野越えという註釈に疑問を抱いたのがきっかけで、何度も歩いた。その当時は自家用車はなく、矢板——船生間をトロッコに客車を連結した鉦山ローカル線が走っていた。玉生はその沿線にある鉦山の麓の村で、矢板まで起伏の多い山間であり、沢村へも野越えというよりは山越えである。沢村の崖を越え箒川を渡ってはじめてひろびろとした那須野ヶ原なのである。私の芭蕉熱は黒羽に及んで更に加熱した。当時の役場には観光課はなく、勿論パンフレットなどもない。しかし何処にでももの知りの長老がいるもので、夏休みの陽盛り、麦藁帽子を被って一緒に歩いてくれた。藪をかきわけ田圃の畦道を歩き、碑に出あう欲びは格別だった。浜田先生の講義には最初と終りの二回出ただけだった。図書館の本も借りず、自分なりに芭蕉と奥の細道に関する書籍を山程も買い集めた。そうして私は狭い範囲だが私の「奥の細道」を極めたと思った。百点が貰えると自負していた。あとで判ったことは、出席率が零に等しかったからだという。

## ○——私の新入生だった頃——○

機械工学科助手 鈴木俊紀  
(昭和40年工学部機械工学科卒・第1期生)

20年前、昭和36年、安保問題で世の中がまだ騒然としていた時東洋大学工学部機械科に入りました。私事になりますが、中学の時は勉強しましたが高校になってからは勉強しなくなりました。何をやりたいとか、何の為に勉強するのが理解出来なかったのです。それでも卒業の時、自分の行きたい大学を言うと、先生も親も反対しました。ただ苦勞するだけだからと。そこで入れそうなところと地方の大学の文科系の学部に入りました。そこに半年通った。何んとなくしっくりしないので学校にはいかず、社会を見ようと種々のアルバイトをやりました。ある時、その大学の学長の授業を受けてましたら、「自分の大学に誇りが持てない人はやめなさい。」と話された。何々良いことを言うその通りだと、親には無断でその学校をやめました。父親は息子を大卒にしたいので(これは私が生まれた時からの願望だそうで)又学校へ行けと言う。工科系が良いから工学部を受けると言う。そうしようとそれから受験勉強を始めた。大学は受けたが落ちた。そこで職安へいってある会社に入ることが決まりかけた時、親父が新聞を持って来て、東洋大学工学部が新しく出来る。産学協同で産業界がこぞって応援している。教授も東大の先生が多く優秀な人がそろっている。日立は3億も出したそうだと言う。3月の下旬か4月の上旬に試験を受けた、何んとか迂り込めた。全寮制にして教育するのだと言うので寮に入る手続をした。

忘れもしない5月25日に入学式が催された。1号館が工事中で足場が掛っていた。1号館の401

41 3	45 9	46 6	47 9	50 1	51 2	51 4	52 3	52 4	52 4	53 6	53 10	54 3
創館 立竣 80工 周年 記念	工館 学部 落成 図書 館分	図 書 館 本 館 落 成	朝 霞 校 地 買 取 開	附 校 閉 校 決 定 南 部 高 等 学	新 7 号 館 落 成	川 越 6 号 館 落 成	朝 霞 1 号 館 完 成	次 朝 霞 で 授 業 各 学 部 一 年	朝 霞 分 館 開 館	甫 水 会 館 完 成	井 上 振 興 基 金 設 立 記 念 学	朝 霞 2 号 館 完 成



号室であった。その時建っていたのが、木造のABC棟、学生寮、教職員寮と1号館だけであった。授業はBC棟、A棟の左側が事務室、その反対側が図書室だったのではないか。図書室については余り記憶が無い。食堂がどこにあったと思いますか。学生寮の一階ロビーでした。夏休み後は今の自転車置場の北側部分に移りました。寮生活は楽しかった。皆で朝までさわぎ、話し合った。朝食をとってから寝る日が続きました。

東上線が単線で1時間に1本しか電車が通らず、電車も学生の姿を見ると発車を待ってくれました。鶴ヶ島駅前には店が1軒しか無かった。その1軒は踏切のところ、のんきやと言う漱石の草枕にでも出て来そうなおぼあさんが1人居てラーメンをゆっくり作ってくれました。学校までの道は踏切を渡って線路の向う側へ廻り、その道をずっと進み今モートルの入口のところを左に入り線路を渡って（今は道が無い）、野球場の所に出てグラウンドにそって来ました、この道1本しか無かったです。塀もずっと後になって出来ました。モートルなんて全く有りません。野球場の合宿所も木造の建物でした。霞ヶ関駅前も少し家があっただけ後は畑であった。電車が無く国鉄的場駅か

ら歩いて来たとか、池袋で電車に乗り遅れてよく喫茶店に行くと、いつも同じメンバーが居るという話を良く聞いた。

6月になって学校に慣れ、友達の顔が解つて来るとクラブを作ろうと話しが持ち上がって来た。今ある工学部のクラブはその時に出来たものが多い。ワンダーフォーゲル、バレー、庭球、弓道、サッカー、自動車部等……。誰れがどのクラブを作ったと、クラブと人との関係においてなつかしく思い出される。私自身ワンゲルの創立者の1人になれたのは幸運だ。

夏休みは短かった。入間川で泳いだ。

卒業の時、5月に就職が決まりましたが10月になってケチがつき、そこをやめました。オリンピック後の不景気で就職が決まらないでいると、学校に残らないかと話しが、そのまま残りました。よくよく東洋大学に縁があったのですね。まだ東洋大学に恩を返しておりません。これから返そうと思っています。私が返せない時は息子に頼んでおきましょう。

20年間ぼんやり過してしまいました。人には勧められない私の人生です。

## 昭和55年度学生購入希望図書状況

(白山)

申込者の内訳は表のとおりです。学生希望の予算は10月半ばまでの約半年間で使いきり、それ以降は予備費などをあてて購入しています。予算の不足や、申込から貸出できるまで時間がかかるなど、十分なサービスとはいえませんが、ほとんど希望の本は入ります。今後どうぞ活用して下さい。

なお、希望の図書が貸出せる状態になりますと掲示などでご連絡しますが、氏名は出ません。もちろん一番はじめに借りられます。

昭和54年度

予算 1,056,000円

決算 2,506,329円

申込 399件うち31件絶版で入手不可

昭和55年度

予算 1,532,000円

決算 2,195,526円

(2月16日現在)

申込 279件

申込者	件数	申込者	件数
文学 国文	24	経営 経営	3
哲学	20	商	1
仏教	14	経済 経済	68
中哲	2	社会 社会	21
英米	4	応社	12
教育	3	短大 日文	10
史学	27	大学院	54
法学 法律	7	不明	4
経法	1		

(1981年2月16日現在)

# シヅメズ 読書論

## 万巻の図書への惜別

学長 磯村 英一

中学2年生のときだった。漢文の時間で、「緑林豪客胆何小 不奪胸中万卷之書」というのがあった。いうまでもなく、緑林豪客は強盗のこと、押し入って“万卷之書”を奪ったらしい。その主人公がいったのがこの言葉である。万卷の書を盗まれても、胸中にあるものは盗めないだろうという。自信ともとれるし、負けおしみともいえる。

しかしこの言葉を忘れることが出来ない。実は、家に“書齋”といっってはおこがましいが読書する部屋が2つある。まず第1の部屋は新刊書（それも1ヶ月だけ置くことにする。）と、現在の私の関心の焦点である「同和問題」（未解放部落問題）の資料をおいてある。これにはわけがある。去年の始めに、すべての蔵書を居住する目黒区の図書館に寄付することを決意した。そのなかには、都市問題や社会学の著書など、かなりの珍しいものもある。しかし、目黒区にすでに半世紀も居住しており、目黒区史を2回にわたって編さんしている。そのようなつながりからすると、図書館にまとめて“都市問題”という名でおいてくれるというのでそのように決めたのである。

しかし、そのなかで同和問題に関する資料は、ここ20年来、私がある程度情熱を傾けて取組んだテーマだが、まだ未完成である。最後には、このテーマについてのまとめをしたいと思って、身近な第1の部屋にまとめておいてある。

第2の部屋は、文字通りの書庫、15,000冊ぐらいいはある。故大宅壮一とは大体同じクラス、彼が残した大宅文庫も、それを維持するメンバーとして参加しているが、それとは比較にならない数で

ある。やがてこのままで目黒の図書館に収まることになる。

そこでなぜこのような決心をしたかという、はじめの漢文の言葉につながる。たしかに書齋にこもり、書庫に入ると、いろいろな本を見たくなる。見はじめると時間のたつのを忘れてしまう。私にとって家庭は居住するところだから第1の空間、職場は第2の空間、そして誰にも束縛されない大衆としての第3の空間がある。ただ家庭の中でも、一度この書庫に入ってしまうと、私の第4の空間が形成される。それは生活のなかで、自分と活字との闘いの場であり、明日の人間形成の基地でもある。

しかし最近、あまりにも多い刊行物の洪水のなかで、それをどのように選択して自分の人間形成に役立たせるかの方法を身につけた。新刊書や新聞の切抜きを、1週間、1ヶ月、1年とABCに区別してマークし、Aというものは永久？ 保存にするという選別である。この仕事は、夕食後少くとも一時間はかかる。それが終わらないと絶対に就寝しない。

このように書くと、私はまだ中国の学者に及ばないことに気がつく。寄付する、選択するといいいながらまた万卷の書に頼っているからである。早く書齋を空にしなければならない。それで、はじめて“学者”といえるのではなからうか。



### KOΣMOΣのルーツは!!

館員からのアンケートで、14号(1971年)からKOΣMOΣ(コスモス)とつけられました。ギリシャ語で宇宙という意味です。書物の世界を宇宙という広いイメージでとらえてみたらどうでしょう。



## 私のすすめる一冊の本

「家庭と職業」——婦人の二つの役割——

A. ミュルダール/V. クレン著

大和チドリ/桑原洋子訳

ミネルヴァ書房 昭和43年

神田道子

(文学部助教授)

婦人問題は多様な形をとって現われるが、戦後、もっとも特徴的で、かつ大きな問題といえるのが、既婚女性の職場進出に伴う問題である。この「家庭と職業」という本は、そこに焦点をあてて、二つの役割を持つことによって生じる役割葛藤の問題を、さまざまな角度から分析している。本書の原書である Women's Two Roles が出たのは1956年のことであるが、日本でも1960年頃から、職業を持つ既婚女性が増加し、両立が問題になった。男性と同じように働こうとすれば家庭や子どもに、しわよせがくるし、家庭や子どもに力点を置くと、職場では評価が低いというように、両立は大変に難しいのが実状であった。こうした傾向は先進工業国では共通であっただけに、この本も多くの関心を集めた。そうしたところからみても、この本は戦後婦人問題の基本的文献といつてよい。

著者の A. ミュルダールさんは、スウェーデンの人でユネスコに勤務したあと、各国大使を歴任し、さらに軍縮大臣を務め、行政関係で活躍している人である。家庭では2児の母でもあり、ご自身が家庭と職業の二つの役割を持ってやってきたという経験の持ち主である。一方の V. クレンさんは、イギリスのリーディング大学の社会学教授であり、女性の役割について研究している人である。この二人の組合せはこの本には非常にプラスになっている。役割に焦点を絞った綿密な現状分析、それに基づく方向づけ、具体的な対策の提示は、大変によくわかるし説得的である。

私自身との関連でいえば、一般的な意味での文献というほかに、この本で家庭と職業の両立対策として取り上げているパートタイムの仕事につ

ての記述は、後に「パートタイムと女子労働」についての論文を書いた時に、ずい分、参考にさせてもらった。このように、戦後の婦人問題を明らかにしたという点からも、また、私自身にとっても、この本は特別な意味を持っている。

だが、今、新たな状況が広がりつつある。女性の家庭と職業の両立だけでは問題の根本的解決にはならないことがはっきりしてきている。そして、女性だけでなく、男性もまた女性と同様に、職業と家庭の両立が必要であり、さらに、二つの役割に加えて、地域を形成していく役割の三つを持っていくことが必要になってきている。(私はこれを三つの役割の鼎立と呼びたいと思う) こうした新しい状況が広がってきてはいるが、それは、二つの役割葛藤という問題を土台にしており、その点でやはり、この本は戦後の女性の出発点を示しているといつてよいだろう。

(367.9:MA:2)

+++++

### 工学部分館より

#### ◦ 帯出カードの改正

今年度より帯出カードが改正されました。従来は一年毎に新しく書き換えをしていましたが、今回から、入学時に一度作ると、在学期間中(普通四年間)有効となります。但し、次の点に注意して下さい。第一に、進級時に必ず更新チェックを受ける事。第二に、住所変更のあった時は、直ちに届け出る事。そして、カード裏面の注意事項を良く読んで下さい。又、長期間使用致しますので、特に大切に扱う様お願いします。

#### ◦ 寄贈本のお知らせ

KOΣMOΣ50号のシリーズ読書論に「私の読書方法」という題で執筆していただいた、土木工学科、比企三蔵先生が、たくさんの本を寄贈してくださいました。これらの本は、先生の愛読書(恋愛小説・歴史小説・推理小説 etc.)であったもので、“多くの学生の皆さんに読んでもらいたい”ということで図書館に贈られたものです。皆さんに利用されることを期待しています。



## 白山より

昭和53年6月12日の宮城県沖地震及び、東海地震などを想定して、各大学図書館などで事故防止対策を進めていると仄聞しています。当館でも地震のときの事故防止のため、昨年12月、参考室・雑誌室・閲覧事務室・雑誌事務室・9号館2階書庫に設置されているもので倒壊可能性のある書架、その他新聞コーナーの展示ケースの耐震工事をを行いました。これによって地震時に倒壊などによる事故を未然に防ごうというものです。

なお、視聴覚室のレコード架、その他のケースの倒壊防止工事を行なう予定でしたが室内の構造上の問題から今回は見送り、後日行なうことになりました。

## 朝霞分館より

ご入学・ご進級おめでとうございます。私は、朝霞分館の蔵書第1号の「何のための学問」(002:RT)という本です。皆様がこれから1年ないし、2年の間この分館を利用するにあたって、私たち蔵書約3万余冊を代表して、一言お願いを!

毎年私たちの仲間が多数、行方不明になっています。私たちが外へ連れ出す時は、必ずカウンターで連れ出す手続きをして下さい。また、館内で利用を終わった私たちは、ブックトラックと呼んでいる返却台へ置いて下さい。書架にいる私たちはある一定の規則によって並んでいます。間違った場所へ並ばされると、いつも両隣にいる仲間には会えなくて寂しい思いをします。また、私たちの体に線を引いたり、体を破ったりしないで大切に扱って下さい。私たちは、これから何年・何十年と長生きをして、皆様のお役に立ちたいのです。この他、私たちを利用するのに一定のルールがあります。このルールは、私たちを有効に利用してもらうための最小限のルールなのです。良く守って快適な利用をして下さい。

「図書館利用総合案内」(利用のしおり No.1)が用意してあります。

## 館内だより ('80.12/31~'81.3/31)

### ～会議～

私立大学図書館協会役員関係 (1/21, 2/5, 2/26, 3/3, 3/5, 3/13, 3/20~21), 国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会 (2/6野村・山内(四)), 国公立大学図書館協力委員会 (2/6野村・山内(四)), 同ニュース編集委員会 (3/3小島), 図書議員連盟「図書館事業振興法(仮称)」立法化について (3/6山内(四)), 文部省学術情報センターシステム説明懇談会 (3/26小島)

工学部分館連絡会 (1/26), 白山連絡会 (1/27), 工学部運営委員会 (2/6), 朝霞分館連絡会 (2/27), 白山運営委員会 (3/17)

### ～研究分科会～

書誌学 (1/17山内(四)), 音楽資料 (1/19, 3/13矢野), 分類 (1/21日野・佐藤), 逐次刊行物 (1/23, 3/17村山・島村), 相互協力 (1/27, 3/17村田), 書誌作成 (3/14~16小笠原)

### ～その他の研修～

私立大学図書館協会研究部会 (3/13野村・山内(四)・大和田・丸山・森・村山・関矢), 工学部分館研修会 (3/16), 共同利用教育センター 構想研究懇談会 (3/17~18 神林), ロッキード・ダイアログ説明会 (3/18 崎村・久保田)

### ～催しもの～

白山映画会 (シュールベルト物語 1/21), 白山展示 (地図特集 1/10~2/10)

### ～その他～

蔵書点検 (白山3/2~14, 工学部3/2~14, 朝霞3/2~7)

ポーランド物質文化史研究所 副所長ロスワノフスキー教授来館 (3/3)

退職 整理課: 寺島朋子('80.12/31), 佐藤禎子('81.3/10), 図書課: 関矢ひとみ (3/31)

## 編集後記

この春号で1年の任期が終った。アーしんどかった。(H)

寄稿に御協力していただきありがとうございます。(S)

春の風は強い、図書館の香りもピュッーと!?(S)

KOΣMOΣで石蹴りして遊びませんか。(H)

編集委員も終って心から春です。(T)

(今期編集委員はこの号まで。ご協力感謝いたします。矢野、柴、嶋田、佐藤、飯山、関矢)